

教 仏 名 聞

第49号
(発行日)

2014年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

光 雲 無 碍

光雲無碍如虚空

一切の有碍にさわりなし
光沢かぶらぬものぞなき
難思議を帰命せよ

現代語意識

(弥陀の光明は雲のようにあまねくいきわたり、一切の衆生に法雨をそそぎ、虚空のごとく衆生のどのような煩惱悪業にもさまたげられることなく(無碍光)すべてのものに恵みを与え給う。不思議の弥陀をたのみとせよ)

* * *
今回のこのご和讃は、曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』にあります

「光雲無碍にして虚空のごとし。ゆゑに仏をまた無礙光と号けたてまつる。一切の有礙光沢を蒙る。このゆゑに難思議を頂礼したてまつる。」の句を親鸞聖人が和讃されたものです。

「光雲無碍如虚空(光雲無碍にして虚空のごとし)」に

ついて聖人は「光、雲の如くして碍りなきこと虚空の如し」と左訓(注)しておられます。

「光、雲のごとく」といわれるのは分かりにくいのですが、阿弥陀仏の光明を、大空を覆っている雲に譬えておられるのではないのでしょうか。光明を雲に譬えて「光雲」といわれているのであります。

阿弥陀仏の「光」とは、阿弥陀仏の無量の智慧と慈悲のはたらきのことでありましよう。ですからその量りない阿弥陀仏のおはたらきが一切衆生の上に、なにもものにもさまたげられずに、行き渡っていることをここでは大空を覆う「雲」にたとえられているのではないのでしょうか。

大きな雲は私たちが覆い、雨になって山川草木に水をそそいで、潤します。そのように、阿弥陀仏の光明は、雲のごとくに万物を覆い、衆生に法の雨をふらして、養い育

で、私たちの心を潤沢に潤して下さいます。このようにこの和讃を味わいたいと思います。

私たちの心は飢え渴いでいるのではないのでしょうか。いつも「もの足りない」と感じている私たちは、外に満足を求め、慰めを求め、気晴らしを求めて、「もの足りよう」「満足したい」とうろろうし、あせっています。へもう高齢になつてしまった。死ぬ時には後悔の無いようにできるだけ、楽しんでおきたい」とあせっているようにも思いますが。元氣な間に行きたいところや見たいところに行っておかねば損だとばかりに、しよつ中、出かける人もいます。

私もそういう煩惱を自分に感じる時もありますから、人のことは言えませんが。この世を去る時に、「私は充分生きた」と言えるかどうか。いや「もっと生きたいの」にここで死ぬのは残念だ」と

てて下さいます。阿弥陀仏の功德である光雲は、雨となつて私たちにこの上ない恵みをふり注いで、私たちの心を潤沢に潤して下さいます。このようにこの和讃を味わいたいと思います。

「朝に道を聞いて夕べに死すとも可なり」という孔子の有名な言葉がありますが、「夕べに死すとも可なり」いわば今晩死んでも満足であるといえるのは、「普遍的なまこと」にであつて、すでに心が満たされるからでありましよう。

今までにたくさん美味しいものを食べ、さまざまな美しい自然の風物にも接し、いろいろな観光地にも行き、沢山の音楽を聴き、映画やテレビで毎日のようにいろいろな映像を鑑賞し、スポーツを楽しみ、さまざまな人とであつておしゃべりもしてきました。しかもなおそういうものを追いつけて「もの足りよう」としています。しかし、それらによつても我が心(たましい)はなお満足できないものなのです。

こういう人生生活を送る人をインドの世親菩薩(バスバンドウ。四〇〇〜四八〇)は「空過者」(むなしく過ぎる者)と『浄土論』で仰せなっています。全てのものは過去へ過去へ

と流れ去っていきます。いろいろな楽しみはみな思い出なくなって行きます。「できるだけ生きて沢山の楽しい思い出を残したい」とせつせと思い出作りに励み、あちこちに行っているんな景色を写真に撮りまくったりします。でも、思い出は沢山できて、もう言っている私は死につつあり、死んでどこへいくのでしょうか。

そういう過ぎ去って思い出となるだけの楽しみには、どうしても「はかなさ」があります。それを蓮如上人は『御文』（一帖目）に

「人間はただ電光朝露の、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。たといまた栄花榮耀にふけりて、おもうさまのことなり」といとも、それはただ五十年乃至百年のうちのことなり。」

と仰せになっています。それらの楽しみは私の心の表層の部分を満たすだけです。私たちの心は自分で考える以上に底はずつと深いものです。

この魂の深いところで、私を満足させず、底晴れせしめないものがあります。それは何でしょうか。心の底にうご

めいている欠乏感は何でしょうか。

それはいろいろありましようが、一番大きなものは、「私はどこまでも生きたいけど死なねばならない」「私は死へといそぐものである」という魂のうめきではないでしょうか。このうめきはいろんなこの世の慰めや快適さや快樂では解消できないものなのです。

しかるに、すべては過ぎ去り、思い出となっても、過ぎ去らないものがあります。あたかも、川の水は一瞬一瞬に流れ去りますが、川底はいつでも動かないがごとく、今の生のいとなみはすぐに過去へ流れ去りますが、決して過ぎ去らないものがまします。

それは、今ここにいつでも私とともにいて下さる「量り無きいのちと光」（阿弥陀仏）であります。

阿弥陀仏はいつも私とともにいて、私に〈南無阿弥陀仏〉と恵みの雨を降りそそぎ、喚びかけておられます。いつでもどこでも私とともにましますゆえに阿弥陀仏を無量寿佛（如来）ともうします。いのちはかりなく光明はかりなき

お方です。

阿弥陀仏の光明は大悲の智慧の光ですから、私の心の闇を照らし明るくし、私たちに生きる力を与え、喜びを与えて下さいます。阿弥陀仏の光は私の心の底から潤して下さいます。まさにここである（光沢かぶる）のであります。この光は、私たちの人間性の良し悪し、能力の有る無し、頭脳の優劣、経済力の大小、民族の種類など一切の条件や制限や区別にさまたげられず、一切の生きとし生けるものを平等に照らし、働きかけ、喚びかけ、養いそだてて下さいます。「一切の有碍にさわりなく、照らして下さいます。」

釈尊は「阿弥陀仏まします。すべての衆生を照らし、喚びかけて下さる阿弥陀仏の光に気づいてくれよ」と浄土の経典をお説きになりました。

説かれた教法は、「阿弥陀仏はいつも我らとともにまします」ことを私たちに告げ知らせて下さっています。これは私たちに無条件に与えられている恵みであります。この恵みこそ、私たちを空過せしめず、流転せしめない恵みで

あります。聖人の御和讃には「本願力にあいぬれば むなくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へたてなし」とうたわれています。阿弥陀仏のお働きである本願力にであうならば、阿弥陀仏の大悲のお心と離れなくなり、阿弥陀仏の大悲に慰められ、勇気づけられ、未来に希望が与えられます。

そういうさまざまな功德が与えられても、煩惱はいぜんとして起こりづめですが、煩惱によつても阿弥陀仏と私の間は障げられたり引き裂かれたりはせず、煩惱の我が心に阿弥陀仏の大悲の心が融け込んで一つになって下さいます。

その阿弥陀仏へは私の方からあいにくとしてあえまません。幸福の青い鳥を外に探し求めても青い鳥はどこにもいないように。青い鳥は外に求めてもいないのです。じつは青い鳥は私たち一人一人とともに既に今ここにいます。ただそのことに気がつかないだけなのです。

青い鳥（阿弥陀仏）は、私たちと共にいたもうだけでは

ありません。〈南無阿弥陀仏〉と鳴き続け喚び続けておられるのです。その喚び声をお念仏の声において聞くと、「ああ私は阿弥陀仏様にだかれていたのだ」と知らされます。南無阿弥陀仏と喚びかけ、「汝を助ける、引き受ける、浄土へ連れていく」と仰せ下さっているのです。

この阿弥陀仏のお用きをここでは〈難思議〉といわれています。私たちの思議いわずば思案や考えや思索のおよばない有難いお用きが弥陀の本願力であり南無阿弥陀仏なのだという思し召しです。

「汝をそのままなりで助ける」という南無阿弥陀仏の大悲の仰せは、私たちの考え（分別）をいかほど積み重ねても、納得できる話ではないのです。そうでしょう。「極悪人よ、我が名を称えるばかりで仏にする」というお誓いからです。

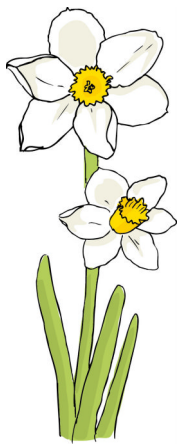
なぜそうなのか。私たちのように、「こうだからこうだ」と原因と結果で理解しようとする頭には「わからぬ話」です。しかし、この南無阿弥陀仏のお話は、理屈はつかないけど、なんとまあ有難い話で

はありませんか。「一声となえるばかりで往生せしめる」という阿弥陀仏の大悲の誓いは、なぜそうなのか分からないけれど、これがまこととすると驚くべき受容（救い）ではありませんか。

このみ言葉が極めて有難い仰せと感じないのは、自分がまだ何とかなる、どこかに救いがまだあると思っているからです。右にも左にも行けぬ前にも後ろにも行けぬ、どうしてみようもない袋小路にいる死人の如き私たちと知らされるなら、この不思議で大悲極まりないみ言葉に「ありがとう」としたがるほかはありませんか。

それでここに「難思議を帰命せよ」と、思議しがたい不思議な大悲の仰せを「ああ不思議なお助けよ」とたのめ、誓願不思議にまかせよと聖人はおすすり下さるのであります。

(了)



《住職雑感》

ドライ・ラマ師に次いで世界的に有名なベトナム僧のティク・ナット・ハン師（フランス在住）が、「もしかしたら、あなたは、自分が政府に入って権力を得れば、したいことができる」と、考えているかもしれません。しかし、そうではありません。もしあなたが大統領になれば、同じ厳しい現実には直面するはずで、たぶん、あなたは、まったく同じことをするでしょう。少し弱ったやり方で」と言っています。自分が政治家になって政治を動かせるようになる、政治を改革でき、社会はずっと善くなると思うだろうが、そうはいかない。いざ実際に改革しようとする、さまざまな抵抗にあつて、たいしたことはできないと、ハン師は言っているのではないのでしょうか。

さらにハン師は「政府の自由は、私たちの日常の生き方に依存しています」と言います。なぜ理想的な政治はできないのか。それは政治を底で支えている国民の日常の生き方や考え、いわば人生観や倫理観に依存している。国民の日常の生き方や考えが正しく養われていない

と、一部の誠実な政治家や政策にたずさわっている者だけの理想的な理念では社会は動かないといわれるのであろう。いわば社会の土壌が善くならないと本当には政治は善くならない。逆の面があるにしても。

たとえば現代の日本人（あるいは組織）の考えの中に「政府の政策によつて景気さえ良くなり、所得さえ上がれば、あとの政策は問題があつても目をつむる」とか「景気よければ全てよし」という意識なり考えがかなりあると思う。景気が良くなること一番で、たとえ世界の紛争に巻き込まれる可能性があつても、あるいはリスクのある原発を再稼働するようにも、目をむらうとする。こういう考えの中にあるのは、経済生活の安定、所得の向上が一番の関心事であり、それが人生生活の中心であるとする思いが強いからではなからうか。こういう国民意識が政治を動かす底流となつているので、まじめに社会を善くしようとする一部の人が旗を振つてもなかなか国民多数は動かない。

こういう「経済利益第一主義」の人生観を浄化するのが宗教の大事な役割の一つであると思う。上部構造の改革も大事だが

社会の下部構造すなわち社会の土壌、それを浄化することが、大変大事だと思われる。たとえ効果はすぐには期待できないとしても。

日本人は他の国民に比して、交通ルールなり法律を守ろうとする意識が高いし、人にも親切であり、そう簡単にウソはつかない。こういう倫理感は一朝夕にできるものではない。長い間の日本の歴史の中でつちかわれてきたものである。六世紀に日本に入ってきて土着化した仏教はこういう良き土壌化に寄与してきたと思う。ただ近世になつて仏教の影響力が衰えてきたことと近代日本が戦争に積極的に関わつていったこととは深い関係があると思う。

(了)

以上

《遠方法話予定》

(詳しくは念佛寺に尋ねて下さい。)

*十月十一日。福井別院。十時始。

*十月十五日。名古屋市、坪井宅（十時～二時半）。座談有

*十一月十日。名古屋別院。十時から二時半。座談有

*十一月十七日（午後）～十九日（午後）まで。福井別院。法話と座談。別院（☎076214100）宿泊可。

*十一月二十三日～二十四日。金沢市、名聲寺

*十二月十三日～十四日。姫路市、西源寺

*十二月十七日。福井別院。十時始。

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（月）

午後二時始

ご講師 芦屋市

片岡 雅子 先生

*なお十二月二十二日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。

木村無相さんの法信 25

安心者」、
というよ
りも「無
安心者」
の

(昭和五十八年九月八日の私へのお便りの続き。無相さん七九歳。亡くなられる四ヶ月前のお便りです)

* * * * *

そういう意味では、
メクラの子は、目アキになってからではなく、メクラのまんま、目アキの如來に

ただ念佛、
と、「手を引かれて」、「生死出離之境涯」、無量光明土に、まいらせていただけるのであります。

今生、ただ今でなく、

臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す

で、「來生の開覚」で、充分なので、御信心いただいたら、ソコが、「成仏だ」、「悟りだ」と言われても、このような「地獄一定すみか」の身は、かえってこまります。

『歎異抄』第十五條に、
來生の開覚は、他力浄土の宗旨、信心決定の道なるが故なり、
でいいのであります。

「信心いただいたところがサトリである」今の若い人は言いたがり、先生、講師まで、そう言いたがり、それが真宗の「現代的解釈」と得意になって、「現代がっている」が、あれは、実質的には『歎異抄』における
誓名別信系の

知識的、観念的、哲学がっている「異

言うこと、教えることで、ワレワレの、実際に即しません。

『歎異抄』第十五條の最後に、
浄土真宗には、

「今生に本願を信じて、彼の土にしてサトリをば開くとならい候うぞ」
とこそ、故聖人の仰せには候いしか。

と唯円房は、言っているが、この通りだと思えます。
さて、今回の手紙、とうとう50になりました。もう「目」も「腰」もつかれましたから、これでやめさせてもらいます。

今回の紀さんの手紙、「真実信心」とは、どういふものか、ということについてのお領解、まことにまことに、うれしくうれしく、ありがたく拝読しました。

この「真実信心」こそは、善導さまのいわれる「二種深信」の「二種一具の真実信心」でありましょう。
さればそくばくの業をもちける身にてありけるを(信機)

たすけんとおぼしめしたちける(念仏往生の)本願(法)のかたじけなさよ、はそのまま、「二種一具の真実信心」よりのお言葉です。ね、これ即ち「ナムアマミダブツ」「ただ念佛」のホカないことです。

今、愚悪のワレラの口に、声にのぼり

たもう、「お念佛」は、

智慧の念佛

にて、まします故に、智慧即ち佛智、佛心、如來の念佛にてまします故に、ナニゴトも、不審あれば、
問題をもつたまんま、
念佛しておれば、
智慧の念佛さまなれば、
お念佛さま、そのものが、
ワレラの「不審」も、オノヅカラ、
解いてくれましょう。

一蓮院がある夜、
香樹院師のところに行きしに、
香樹院師曰く
「お前も、アチコチ聞き歩かず家に居て念佛申していなされ」
と申された由。

いよいよとなれば、ヒトリ居て、念佛聞思、称名聞思することが大切と思えます。
人師といえども、皆「死んでしまうモノ」で、結極は「自分一人」となることであるから、最後のには、かの土まではなれないお念佛様によって、不審は、問題は、世間・出世間の問題ともに、念佛聞思させていただいて、
智慧の念佛さまに、お聞かせいただくのが最高、最上だと思います。

もちろん、聖教、聖典、聖人、先徳の『語録』に聞くこと、又、大切ですが、人間は皆、死んでしまうもの、アテにならぬものゆえ、本願念佛、智慧の念佛、如來の念佛、お声の親さまをいただければ、「念佛聞思してゆくが」ギリギリの「道」と、思われることです。

それゆえに聖人は、

ミダ大悲の誓願を

深く信ぜんヒトはミナ

ねてもさめてもへだてなく
ナムアマミダブツ称うべし
とおさとし下されたのでありましょう。
この御和讃を何十年という間、
称名念仏の「強要」「強制」の如く、
キユウクツに感じていました。が、
単なる念佛の「強要」「強制」でなく、
「ねてもさめても称うべし」
は、如來大悲心よりのお言葉であり「如來大悲」なのであります。

今、丁度、「午前三時」、今朝は、
0時半から、丁度、二時間半、書き、
つかれました。これから二時間、ウトウトと、してから病院ユキの準備します。
今回のお手紙まことにありがとうございます。
いしました。

こうして書くことは、ヒトのためでなく、私が書いて御縁にあうのです。真由実ボサツにおよろしく、元きに長生きして下さいよ。では。
ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ、
合掌
(58、9/9(金)午前三時0五分)
(了)

《聖典学習会》

毎月六日(午後七時始)

担当 住職

*テキストは寺でも用意できますが、入手可能です。テキストを読んで話し合います。